

介護老人保健施設 しおん

症 例 概 要 利用者氏名：T様・女性（80代・要介護4）

利用期間： 平成29年11月～

経過：平成23年に鬱症状。平成24年にパーキンソン病になり治療していたが、家族の事情により治療中断。平成27年腰椎圧迫骨折、骨粗鬆症から腰痛出現し徐々に歩行低下。廃用症候群により臥床傾向となり、平成29年9月に両大転子褥瘡悪化、低栄養、脱水にて女川町地域医療センターに入院する。右大転子褥瘡治療、リハビリ目的にて当施設に平成29年11月に入所となる。

内 容

震災前はご主人と同じ町内の娘様宅に毎日行き、お孫様達の子守をしていましたが、震災後にうつ症状を発症。腰痛や廃用症候群により臥床が多くなり、一人であることが多く褥瘡になったようでした。

施設に入所するのは初めてで、自分から声を発する事がなく、スタッフが声掛けし会話を少しする程度で、居室で過ごすことが多く、スタッフとご家族との会話に入ることはなく、依存が強く、自分から動くことはない状態でした。

2週間経っても褥瘡は好転せず、T様も施設に馴染む様子が見られず、多職種でカンファレンスを行いました。栄養科からは、褥瘡改善の為に食事に高カロリーのペムパル、ブイ・クレスハイプチゼリー提供。リハからは臥床時の安楽なポジショニングの指導、ソフトマットの交換。看護は1日2回の褥瘡処置を実施。介護は離床時間の増加し、他利用者やユニット内以外の交流を行う事とし、T様が無反応でも声掛けするようケアを統一しました。配膳時は「高カロリー補助食品を摂取すると、栄養になって褥瘡が治りますよ」。排泄で濃縮尿時「水分足りないようですね。水分補給頑張りましょう」。レクリエーション時「気分転換しませんか」。体位変換時は「右手で柵をもって、右を向いてみましょう」。少しずつですがT様は行動で水分を多めに取ったり、体交も声掛けに応じてくれ行うようになりました。

そんなある日、他利用者とスタッフでかるた取りをしており、T様はそれを見学していました。かるたの取り札で“ふるさと”の言葉が出てきた時に、みなさんと故郷の話をしました。T様と同郷の方がおり、スタッフも同郷で、震災で無くなった町の話をしていたところ「懐かしい。」と言語を發しました。「なんだい、あんだ、あのお菓子屋行ってだのが。」「がんずぎ、うめがったよね。」と、一方的な他利用者の話に「そうそう。」と笑顔で相づちを打っていました。楽しそうなT様を初めて見たときでした。

その後徐々にスタッフと会話をするようになり、発する言葉を私達は待つようになりました。T様は待っていると必ず言葉を発してくれるのを解ったからです。

T様は施設に慣れ、他利用者と会話するようになり、カーディガンを自分で着たり、靴下を履いたりと出来ることが増えてきました。ご家族からは「すごい、自分でするなんて。」と喜ばれていました。

春には日和山にお花見に行きました。T様は喜ばれ、枝垂れ桜を手にとり「きれいね。」と言い、今までのお花見のお話をしてくれました。T様と接し「待つ」ことによりT様の残存能力を活用できたり、思いを聞き取れたりと学ぶことが多かったと思います。今後も利用者に寄り添うケアを行って行きたいです。